

たき した じぞう
滝の下のお地蔵さん

美うつくしいお地蔵さんが祭まつられています。
箕浦みのうらに滝たきの下したと呼ばれるところがあり、そこに、今いまから百六十年程前の文政十三年ぶんせい ねん（一八三〇）に建たてられた、冠かんむりを着つけた

鉄道てつどうが開通かいつうした大正五年たいしょう ねん（一九一六）までの滝たきの下したは、オオニシ山やまが海うみに迫せまってそそり立たち、道路どうろはがけに沿そって曲まがりくね
つてついでいました。北きたは海うみ、南みなみはがけ、上うへから木きがおい茂しげっていてとても寂さびしい所ところでした。そして滝女郎たきじょうろうというたぬきがいた
とか、幽霊ゆうれいが出でたとか、追おいはぎが出でるとか言いって恐おそれられていました。

思おもうに、この地蔵じぞうさんは、滝たきの下したを通とおる村人むらびとや旅人たびびとを守まもっていたためにお祭まつりしたのかもしれない。
ある秋あきの夕暮ゆうぐれどきのことでした。日ひはすっかり落おちてあたりは薄暗うすぐらくなり、西にしの空そらには細ほそい月つきが傾かたむき滝たきの下したの夜道よみちをかすか
に照てらしていました。

そこへ一人ひとりの飛脚ひきやくが旅たびなれた足あしどりで通とおりかかりました。どんな急いそぎの用事ようじがあっても夜よるの滝たきの下したは通とおってはいけないといわれ
ていたのに、飛脚ひきやくはちょうちんの灯ひをたよりに、すたすたと滝たきの近ちかくまで来きました。街道かいどうを通とおる人ひとはだれ一人ひとりもなく、落葉おちばを踏ふむ

飛脚の足音だけがサクサクと聞こえるだけ……と、暗やみの中で行き違いにサッと通り過ぎた者がありました。思わず振り向くと、今すれ違ったと思ったのに人影が見えません。足をとめて、あたりに気を配りながら見回していると、「ヒツヒツヒ。」と気味の悪い声で笑う者がいます。飛脚が思わず腰の脇差しを抜いて切りつけると、サッと消えてしまいました。すると、こんどは後ろの方でまた気味の悪い「ヒツヒツヒ。」という笑い声がします。振り向きざまに横一文字に刀を払うと、やみを切るだけでした。こうして怪物は飛脚を手玉にとっていました。やがて一段と高い岩の上に姿をあらわして、

「そんな、つば元三寸（九センチメートル）のところに炭ごもり（刀の鍛え目に木炭の破片の入ったもの）のあるようなまくら刀では、このおれは切れんぞ！」

と言ったかと思うと見えなくなりました。「炭ごもりが入っているか」と言っておったが、まさかと思つて、岩の割れ目に刀を入れて少しこねてみると、ほんとうにつば元三寸のところから折れてしまいました。とたんに、背中の方から急に寒けがして恐ろしくなり、浜の村里へ引き返しました。

この話を聞いた村の人は、四、五人そろわないと滝の下は通らないようになり、また、舟に乗つて余木の方へ行く人も多くなつたそうです。

お地蔵さんの台石には次の世話人の名前が刻まれています。

世話人 当村若連中

小倉屋 音五良

西屋 治郎左門

中屋 平兵衛

戒屋 友人

田中屋 民藏

出来屋 多平

願主 平七

他所世話人中

観音寺下市 友次

同 上市 市蔵

長須村 加兵エ

くわんおん寺 太兵エ

大ノ原 弥三次

余木 若中

川之江 宝者満 連中

文政十三庚寅 七月吉日立

こうした世話人の名前を見ていると、当時の箕浦の青年が中心になって、近郷在住から浄財を集めて建てられたことがうかがえます。

『ふるさと豊浜 第三集』より

